戦争法 安倍政権が成立強行

私たちはこの暴挙を忘れない

憲法九条を破壊し、日本を「戦争する国」に変える憲法違反の立法、戦争法が九月十九日未明、参院本会議で安倍政権によって強行成立されました。圧倒的多数の国民の反対の声を踏みにじる許すことの出来ない暴挙です。婦人民主クラブでは直ちに抗議声明を発表し、安倍首相の退陣と一日も早い戦争法廃止をめざして力を尽くす決意を表明しました。

戦争法を廃止しよう

「安倍政権はただちに退陣！」「憲法改悪ぜったい反対！」「戦争法は今すぐ廃止！」、五千人の参加者のコールが夜空に響き渡りました。九月二十四日、戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委員会が主催する「9・24国会正門前大集会」が開かれました。

国会に向けて意思表示（9月18日午後4時）

参加者の大コールにつづいて、民主党の枝野幸男幹事長、共産党の志位和夫委員長、生活の党の主濱了副代表、社民党の吉田忠智党首があいさつ。ついで主催三団体からの呼びかけ。高田健さん（解釈で憲法9条を壊すな！実行委員会）は、「私たちのたたかいは敗れていない。九条がある限り憲法違反の法律は無効だ」「この一連の運動の中で、国会内外の行動の団結を推進し、野党のたたかいを強めるという画期的な状況をつくりだしてきた。これからも全力をあげてたたかおう」と訴えました。立憲デモクラシーの会の山口二郎さん（法政大学教授）は「今や『立憲』が、野党、国民の結集の理念となった。行動を続け、権力者に思い知らせよう」と語りました。

この間、毎週木曜日に総がかり行動実行委員会による国会前行動が取り組まれて来ました。今後は毎月、戦争法が強行された十九日に国会前で行動を続けることが提起されました。

私もひとこと

今後も続く反対運動

国会をとりまく何万もの人々の「憲法違反！」「戦争法反対！」の声は国会内に聞こえなかったのでしょうか。

九月十七日夜、降りしきる雨の中で行なわれた仙台での抗議集会の後、家のテレビで法案審議の様子を見ました。

参院安保法制特別委員会のだまし討ちのような強行採決は、何度見ても正式に採決されたとは思えません。鴻池委員長の姿は人に埋もれて見えず、声も聞こえない状態で、どうして可決と言えるのでしょうか。

夜遅くまで雨に濡れながら、国会前で意思表示をしていた人たちの姿には胸がつまりました。

国会正門前　9月18日夜

中央公聴会や地方公聴会で話された意見を一顧だにせず、採決を急ぐやり方には民主主義のかけらもありません。安保法案は成立はしましたが、全国各地で反対行動に立ち上がった人たち、国会を取り囲んで「戦争法廃案」を叫んだ人たちの意思と行動は、これからも持続されるでしょう。立憲主義・平和主義・民主主義を守るために。

（緑ヶ丘支部）

廃止に追い込むまで

国民の声を聞かない安倍政権に怒りでいっぱいです。国会包囲に何回か参加しました。婦人の旗を見つけ、国会前をぎっしりと埋めた人波をかき分けて旗のもとに向かいましたが、たどり着けない時もありました。

「この法案は絶対通してはいけないと思い、家にいられず夫婦できました。このようなところは初めてです」と話しかけられ、「我が家も同じ思いで夫と来ました」と見知らぬ人と会話が弾みました。降りしきる雨の中、こぶしを上げているとすぐ前に創価学会の旗があり、ともに反対の声を上げています。公明党議員にはこの声が届かないのでしょうか、不思議なことです。

日本には憲法九条があり世界の人々から信頼されています。九条を壊すこの法律には断固反対です。平和は暮らしの基盤です。

この法律を実施させず、廃止に追い込むまで頑張らねばと思います。

（港南支部）

運動が政治を動かす

「どちら側から見てですか？」

十八日早朝、国会前に駆けつけた私の「今、歴史的な転換点にいる気がする」の感想に取材記者が問うた言葉です。

「どちら側からも」と答え、同時に「そうなんだ」と自分で気づく思いがしました。

創設以来、なし崩しに、あるいは水面下で行なわれてきた自衛隊の「軍隊化」。それでも立憲・民主・平和主義の砦は、たゆみない運動や良識派により守られてきました。その良識をかなぐり捨て、「私が最高責任者」とばかりに暴走する安倍首相。それを許す一部勢力。この「戦争国家」への転換点に多くの国民は危機感を持ちました。

集団的自衛権行使容認の閣議決定以降、政治的発言をして来なかった学者や弁護士の抗議声明を皮切りに「戦争法」反対の声は日に日に膨張。若者たちの物怖じしないスピーチなども相まって「運動が政治を動かす」ことを体感した日々でした。私たちはまだまだ「負けない」。

（町田支部）

民主主義はこれだ！

「民主主義って何だ！」連日コールが渦巻く国会前。九月十八日夕方からの集会は、警官の誘導で（参加者五人に一人の警官だったとか）国会前の車道の先頭のほうに来ていました。すぐそばに警察車両の壁、警官が見下ろしています。

衆院で野党が内閣不信任決議案の趣旨説明をしている時、国会前を埋めつくした私たちは、腹の底から湧きあがる怒りをたたきつけるように叫びました。

「戦争法案今すぐ廃案」「野党は頑張れ！」

「賛成議員を落選させよう」議事堂の中に届けと力がはいりました。

ここで終わりじゃない。「今から始まるんだね」と見知らぬ同士でうなづきあいました。一九三一年「満州事変勃発」のこの日が再び歴史に刻まれてしまったけれど、誰も絶望していません。

「私たちは平和を手離さない」から。

安倍政権を倒すまで、そしてずっと言い続けます。「民主主義って何だ！」「これだ！」

（品川区）

抗議声明

「侵略戦争法」成立強行に 怒りをもって抗議します

九月十九日、安倍自公政権は憲法違反の「侵略戦争法案」を参議院本会議において採決を強行、可決・成立させました。

衆院強行採決に次ぐこの安倍政権の暴挙に、私たちは満身の怒りをもって抗議します。

侵略戦争法は、アメリカとともに世界のどこへでも、時の政権の判断で自衛隊を派兵し武器をもって他国を侵略する法律です。憲法違反以外の何物でもありません。

ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する」と世界に宣言しました。この憲法を蹂躙する「侵略戦争法案」は審議がすすめばすすむほどその中身が明らかになり、憲法学者、元法制局長官、弁護士らが次々と「戦争法案は違憲であり、廃案にすべき」と断じました。

世論調査でも「戦争法案反対」は六割、七割に達し、国会前抗議行動には世代をこえて組織、団体、市民が連日つめかけ「民主主義を守れ」「立憲主義を守れ」と気迫のコールで暴走する安倍政権を追い詰めました。さらに侵略戦争法可決後も国会周辺で、全国各地で「強行採決は無効」「戦争法廃止！」「安倍政権は退陣せよ」と抗議の声はやむことなく続いています。

私たち婦人民主クラブは戦後七十年、憲法と共に歩んできた団体として「憲法違反の戦争法」を廃止させ、安倍政権を退陣に追い込むまでたたかうことを表明します。

二〇一五年九月十九日